

官版
語彙別記
完全

西海道
大日本
平山彌太郎

T1A1

11

(MO24)

かくきとらあの一言ふとそれるれの添りてきと

語彙別記上巻

活用くも多ふ一段活用といふなり

第三 中二段活用

かき(き)く(く)といふ二言うてそれるれの添りて(き)き(き)と
活用くも多に中二段活用といふなり

第四 下二段活用

かく(く)く(く)といふ二言うてそれるれの添りて(く)く(く)と活
用くも多に下二段活用といふなり

第五 加行變格活用

かく(く)く(く)といふ三言うてそれるれの添りて(く)く(く)と
活用くも多に加行變格といふ此活用ハ來といふ言のとの
活用なり變格と云ふ(く)く(く)と三段ふ活用ガ他ふ異なる
うふ受る辭も異なるが故なり

第六 佐行變格活用

かく(く)く(く)といふ三言うてそれるれの添りて(く)く(く)と
活用くも多に佐行變格といふ此活用ハ爲と御坐との
二言のとの活用なり變格と云ふ(く)く(く)と三段ふ活用ガ

他ふ異なりふうへふ受る辭も亦異なりあが故なり、國と見合せ

あふ
べい

第七 奈行變格活用

かく（ナ）ぬ（ル）ぬ（ル）ぬ（ル）とふ四言みてそれふるれの添りて（ナ）
ぬれと活用くもあふ奈行變格とふ此活用ハ往と死と
の活用なり變格とふ（ナ）ぬ（ル）ぬ（ル）と四段ハ活用が異な
るうへふぬれ（ナ）然言（ナ）希求使令言とわのま又受る辭も異なる
が故なり國を見て
あふべいこれ三つの變格とふ

第八 良行四段一格活用

あ（ナ）む（ル）あ（ナ）ひ（ル）あ（ナ）ふ（ル）あ（ナ）れ（ル）
かく（ナ）ぬ（ル）ぬ（ル）と四言ハ活用くもあふ良行四段一格といふ
一格といふゆゑあふ有居侍坐との四言ハ限まる活用なる
がうへふありを（ナ）む（ル）む（ル）む（ル）とふ常の四段活用の格とふハ連
用言なりを連用と終止とを兼たりされば京ふあ（ナ）ひ（ル）つ
席ふを（ナ）む（ル）む（ル）む（ル）む（ル）と用言より用言へつゞけハ連用言
となり又京ふあ（ナ）ひ（ル）田舎ふを（ナ）む（ル）む（ル）む（ル）む（ル）と終止言ともな
るが常の四段とかより受る辭も亦異なり故ハ一格とい
ふ受る辭の異なりハ國を見合せしあふべいもあふべいも此の活用
なりと其ハ無有然るのあを省きしう詞とて實ハ有とふ詞の活
用なりと皆
ふふ属せり

第一

著 以 干 見 射 居

き ふ ひ み ゐ け

を ま し

し

て

を

し

て

を

し

て

を

し

て

を

第二

起 落 中 恨 老 下

き ち ひ み ゐ け

を ま し

し

て

を

し

て

を

し

て

を

し

て

を

第三

下 獲 捨 獲 添 妻 消 枯 植

け せ て ね へ め せ れ 名

を ま し

し

て

を

し

て

を

し

て

を

し

て

を

し

て

第五 第
格 變 行 加

② 老 老 辛 亡 也

③ 丁 老 辛 亡 也

④ 卯 老 辛 亡 也

⑤ 老 辛 亡 也

⑥ 老 辛 亡 也

第六 第
格 變 行 佐
變 爲

⑦ 老 老 辛 亡 也

⑧ 口 老 辛 亡 也

⑨ 卯 老 辛 亡 也

⑩ 老 辛 亡 也

⑪ 老 辛 亡 也

第七 第
格 變 行 往
死 往

⑫ 老 老 辛 亡 也

⑬ 丁 老 辛 亡 也

⑭ 卯 老 辛 亡 也

⑮ 老 辛 亡 也

⑯ 老 辛 亡 也

第八 第
格 變 行 有
居 有

⑰ 老 老 辛 亡 也

⑱ 丁 老 辛 亡 也

⑲ 卯 老 辛 亡 也

⑳ 老 辛 亡 也

㉑ 老 辛 亡 也

曉東曉東

陽

南

川龍

和

卷之五

張氏藏

建修書

司馬

五

③



③



2

2

३

①

2

⑤



三

三

7

五

五

श्री

Area

1078

1

1

1

1

一階第二階ともせりその詳をかくと人次より示すがこ

三

○第一階ハ四段活用ヲセム
カ
キ
ク
ケ
コ

⑤等なり一段活用とて（キ）（フ）（ハ）（ヘ）（ノ）等なり中二段活

用ゝてゝおろ、おろ、おろ、うゝみ、おろ、おろ等々、下二段活用

王六元、少叶、廿世、十七、不、一、没、主、在、了、等、女

得受瘦捨病茶譽消枯種

り加行變格みてゝ②佐行變格みてゝ③奈行變格みてゝゝ

良行四段一格 有 七六あ 有 七六き活用 有 七六漢 有 七六

き活用とて癡の事なり
作用言の一階は將然言とて未から
むとて詞なり 形狀言の一階は運用

言をも用言へ
詞なり

○第二階ハ四段活用ヲ云々、
必押立達住降
 ぎ、お、た、あ、す、ふ、等

なり一段活用 き ひ み い ぬ 等なり
着候千見附居
一段は將然と連用と
きかぬよりて一

階二階もひらりとさる如様なり
中二段下二階もまたさる定なり
中二段活用してふ
おき
き
この

うら^煩_め、お^老_下等なり。下一段活用にて、^得受_てう^受_てち^瘻_てす。

寝奉そへ譽ほめ消き滅め等らなり、加行かぎん變格へんかくよりより佐行さぎん

變格ふてゝ爲⑪、奈行變格ふてゝ
⑫、良行四段一格ふてゝあり有

くき活用するにあたり、^殊よくよくき活用するなり。^趣く

等

○第三階ハ四段活用ト云々
次 ① みる
押 ② みる
立 ③ みた
連 ④ みて
主 ⑤ みる
終 ⑥ みる

なり一段活用 書 子 子 子 子 子 等なり 四

と一段より終止言と連體言とをひとつとひとつよかぬふ
 ようて三階四階もひとつとひとつにわかれ、國を見てあるべし。中一段活用ふ

てんおく、おつ、こふ、うらむ、おゆ、おる等なり、下二段活用ニ

てふ、う、す、す、ぬ、そ、は、き、か、う、等なり

加行變格うてん^来①佐行變格うてん^来②奈行變格うてん^来③

良行四段一格うてん^有あり^有ありと詞の連用と終止言とをひら

國^有ありとふ^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

へん^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

○第四階ハ四段活用うてん^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり一段活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

ハ三階四階ともうてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

い^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

○第五階ハ四段活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり一段活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

二段活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり下二段活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

なり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うてん^有あり^有き活用うて

○第六階は作用言なり。き活用よりハ淺圖、まゝ志
き活用よりハ變圖等なり

これを作作用言の五階、形狀言の六階よりハ圖面を見合せ
て心うな

つぎハ將然言、連用言、終止言、連體言、已然言、と五つハ轉
する意を志しむ

○將然言よりハゆゑハ志のあらむと志詞なり。四
段活用、の咲よりハ詞より云ハさかハ將然言よりハ其さ
ハ辭のむをこそて云ハさかむとなり。これを俗言ハ譯
セハサカウと云ハ意なり

○連用言よりハゆゑハさきハふなり。の類めて用言より
用言ハ續く詞なり。用言より

○終止言よりハゆゑハ語意よりハ至りてやめなり。花ハ
さく。『花園』。『花回』。『花さく』。『なご』。語意より用
言ハ體言よりハ又終止言ハ花園の體言ハ阿等の係
辭ハ終止言よりハ等の結詞よりハ上ハ花園の阿等の係
辭ハ終止言よりハ等の結詞よりハ上ハ連體言よりハ終止
言よりハ次條よりハ見るなり

○連體言よりハゆゑハ故ハさく。花ハさく。山ハさく。まで用言よりハ
續く係なり。花ハさく。體言よりハ體言
但ハ上ハ花園の阿

類を以て妻一人下巻に云ふ
等カガミの係辭ありと云ふ詞

ハその結詞とかりて其意を結びとむとてちよんふとへ花

園さく『花園さく』『花園さく』『花園さく』『花園さく』『花園さく』世の春をの

けく花さく」と結びしむる類なり、まゝに空やかの何等

の條辭に應ずればなり、
 條辭を以て爲すたゞのてきとらふ詞も
 サクデアロワイヤたサクデアラウと其意の轉

あぢきひてあふ

○サ味とらふ詞ハ終止言と連體言との二つを_レかへる詞。

其終止言の如く、因因等の結詞とあり、連體言の如く

等々諸詞
ありて事

紀解ハ下巻を見て知るべし

○已然言とのゆゑ人然^{しか}りまふことをいふ調^{てう}てさけと

ルサイタガマアと云ふ意なりバカを云ふと云ふ辭を云ふ

花きわたりとくは、花きわたりとくは、花のさなまゝにうて第

ひあうまた置ふそのの階辭あまはさけとらふ調へ締詞上の系辭の

とあるを、**花****屋**に「やむまひさしうゝ」は打り
上**目**の仕辭。

いせたきふしをサハ務ヨイと云意

是を使令言と云ふ^{イハレ}又俗ふサイデタモレと云ふ意なり^{下知詞なり}

なり。是を希求言と云ふを、以上を作用言の五階と云ふ。

使令希求のくと委
くへ下巻にふだう

つぎふ形状言の連用言、將然言、終止言、連體辭言、連體

言、已然言と六つは轉ずる意をあらわむ

○連用言「フ」將然言を兼ねるところハ淺く戀〜〜等として俗に淺ク色ガ染マツタと云ふ連用言のあらざるやうなところハ體淺く〜詞の意ハ色と云ふ體言のほかに色ハ體淺く〜

して深マツタと云ふ用言へ續けたりすれ浅くを察
くむとむの辭をそまふ將然言なりゆゑ第一階の
連用言ハ將然言と共ぬるとなり

○終止言とらふは淺し戀し等なり。そのゆゑは語意をふ
いたうてやめばなり。色ハあきし。色もあきし。色イの
あきし。色あきしイと云ひて終止まるなり。用言つと
體言へもつゞかず。又も輕の多等カクヤクの係辭を受くとの結と
なるなり。

○連體辭言とある淺き戀と等なり。そのゆゑに體の辭
かなふたうをききみるのを體の辭と云ふ。へのつゞきて
體の辭のこころをくみ下卷より云へる。河な

とらへる體言へつゞくがまた上よ^上の等の係辭あま

むむむびこもむとなりて其意を結とむる詞となるこ

ころの^{アサイコト}あさき^{ツナイコト}「人」の^{ウレシイコト}つむぎ^{ウレシイコト}「うふ」^{ウレシイコト}「きく」^{ウレシイコト}が

かたうき^{カナシイコト}「ちよとの類なり

○連體言とらへる淺き戀^{アサキ}き等なりんそのゆゑにあさき心

こひき人の類うて用言へつづかざるべから又上よ

そ^{カサコト}「や」^{カサコト}の^{カサコト}同等の係辭あまばあさきこひきとらへ

詞いその結詞となりて其意を結びとむるこもなるそ

へころの^{アサキ}あさき^{アサキ}「こころ」^{アサキ}「あさき」^{アサキ}「人

のこころ」^{アサキ}「あさき」と結びとむる類なり

○已然言とらへる淺けれ戀^{アサキ}けれ等なりん然なれる

ことをいふ詞にてアサイガマアコヒシイガマアの意なるゆ

ゑに已然言とらへ又上よ^{カサコト}の係辭あまばあさきけれ

ひ^{アサキ}けれとらへ詞いその結び詞となりて其意を結びと

むるこもなるそ人のこころ^{アサキ}「あさき」^{アサキ}「人」^{アサキ}とら

ひ^{アサキ}「あさき」^{アサキ}の類なり

つぎに作用言五階ごをに舉たる辭の用ひざるを示す

る

○第一階の辭はずむ^{アサキ}「なむ」の五つなり四段活用

うへへは^{アサキ}「ず」^{アサキ}「なむ」^{アサキ}「ま」^{アサキ}「なむ」^{アサキ}「ば」とらひ

又一段活用するに⑤ず⑥む⑦ま⑧ぢ⑨む⑩を⑪其意
あすのせく用ふるまきなり 已下段とて定なり

○二階の辭ハてつけりなむこの五つをいひさ⑤てさ⑥
つさ⑦けりさ⑧なむさ⑨なむなり

○三階の辭ハらむべしめりまどなりとかいあどあて
さ⑩らむさ⑪べしめりさ⑫まどさ⑬なりさ⑭と
さ⑮かゝ等なり

○四階の辭ハかなふかりをなまうく 此外をいひかなをたま
類多くあり圖面換くして事なり さ⑯かなさ⑰ふさ⑱なり
さ⑲を等なり

○五階の辭ハをどども三種なりさ⑳を㉑や㉒のいひ
等なりこの外も作用言をうくる辭五階とていふまでも
もその下巻ふ示まべし又くふ四段活用なるさ㉓とふ
ふ詞をとりいぞてふをこの詞めて八種活用のかぎなり
あゝたゝてこの例なることを示さむとてなり
つぎふ形状言六階とていふ擧たる辭の用ひをさゝし
る

○形状第二階の辭はくはくする辭なり但しかなふかりをなま
ふ係辭へて定なり

○形状第二階ハあるをあるてあるとしてあると

ふ

自^み

自^み

み^み

み^み

これ圖面第一等の

あつた^{あつた}詞なり

○その一種のみなる

下^下きあまる^下なり我の書畫などなり

いで他ふみなる又我が琴ひきて他ふきなるをとり

自^み

人^み人^み

こも圖面第二等のあつた^{あつた}詞なり

○他の詞の一種のみなる

下^下きあまる^下等なり他は狂言と

みさなる淨瑠璃をきかきなるなり又みせさなる^下きうせさ

まるともつた他ふ^下狂言をみせさなる他は淨瑠璃をまが

せさなるなりわく二様あつたとつども其意ハ一つなり

他^み

み^み

他^み

み^み

こも圖面第三等の他ふ然せさなる詞なり

○その一種のみなる

下^下きあまる^下なりこの我があつた

書畫のみならず琴の糸のきかきなり又別のみなる

きかき

下^下きあまる^下なり我が書畫を他ふみなる我

が琴の糸を他ふきかきなりわく二様あつたとつども其意ハ一つなり

も詞なり今とけてあつたなりといひ他ふ

圖面第四等の

招のつらに無せらるる
 他は然せらるる
 詞

なん

以上自他の四等やう委しくいふも六等やうで、おのづから然るゝふら然るゝと一等よゝめおのづから然せらるゝと他ふ事のせらるゝと四等よゝめふふは、國と見えては、表し

一	一	一	一
等	等	等	等
物と然もする	他も然せざる	他の一も然せざる	他も然せざる

然乃詞也

然其詞之

2000年10月10日

Wang Kangshu 王康舒

然	遊	立	習	解	落	亂	隔	見	詞	思
四段	あそふ	たつ	なるとふ	とくる	中へたつ	下段	へたつ	下段	下段	下段
然	同上	下段	四段	四段	四段	四段	下段	下段	下段	下段
あそふ	たつ	なるとふ	とくる	おとくる	みどる	みどる	へたつ	みどる	きかえる	おもはる
然	佐行下二段	然	せ	ら	ら	ら	ら	ら	詞	おもはる
あそふ	たつ	たて	たて	なるとふ	とくる	おとくる	みどる	みどる	きかえる	おもはる
然	良行下二段	然	せ	ら	ら	ら	ら	ら	詞	おもはる
あそふ	たつ	たて	たて	なるとふ	とくる	おとくる	みどる	みどる	きかえる	おもはる

あて然せざる詞ハ佐行下二段然せらるゝ詞ハ良行下
二段に限るゝこと上の圖を明たれど猶初學の爲に作用の
諸活字より二かふふかふ定格を圖に著して示す事左の
如し

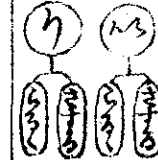
第四		一段	
吠	押	逢	住
か	さ	た	ま
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる

下		二	
得	受	捨	寢
え	け	て	ね
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる

第二		一段		第中	
著	似	干	見	射	居
ぎ	ひ	み	み	み	き
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる

第七		第六		第五		第四	
格	行	格	行	格	行	格	行
死	往	聖	爲	來	來	植	枯
た	せ	こ	め	あ	れ	せ	め
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる

三段老



第八段四行其有居



圖中(る) (る) (る) ともい他ふあがせさるる詞(ら) (ら) (ら) ともい
 へ他ふあがせらるる詞なり熟覽して其用法を曉るべし

語彙別記下巻

詞の活用ハ上巻ふ示したまふところの辭の運用をふむ
 辭の調の下つきてるをさるる調の作用言ハ五階なるを受
 る辭五階あり、形狀言ハ六階あるを受る辭六階あり、そ
 の所屬をば上巻の圖にも著したまふも八種活用ハ
 畧圖してあるをば今に全圖を出さずた圖面ふ(き) (き) とおなごころの重なりおなごころの詞も輕重あ
 りて其意味かわれることをも辭の所屬よりして表
 らしむるなり

○終止言のき(き)輕くしてサキマスといふ意連體言

五十二

第六		第五		第四	
格變行佐		格變行加		段消譽	
爲		来		植枯消譽	
⑥		②		⑤れ⑤め	
をきむを		をきむを		をむ	
①		③		⑤れ⑤め	
をかつて		をかつて		をか	
④		④		⑤る⑤む	
かきり下る		かきり下る		かきり	
⑤		⑤		⑤る⑤む	
をかにか		をかにか		をか	
⑥		⑥		⑤る⑤む	
をかにか		をかにか		をか	

三〇

第二		第一	
下		二	
添寝捨渡受待		下を恨戀落起	
①ねてせけえ		⑤みひちき	
きむを		きむを	
①ねてせけえ		⑤みひちき	
りて		きりて	
⑤ぬつ④く⑤		⑤る⑤む⑤つ⑤	
きり		かきり下る	
⑤る⑤む⑤る⑤む		⑤る⑤む⑤る⑤む	
にか		をかにか	
⑤る⑤む⑤る⑤む		⑤る⑤む⑤る⑤む	
をか		をか	

第八格 一段四行良居有				第七格 一行奈死往			
①	む	き	む	①	む	き	む
②	む	き	む	②	む	き	む
③	む	き	む	③	む	き	む
④	む	き	む	④	む	き	む
⑤	む	き	む	⑤	む	き	む
⑥	む	き	む	⑥	む	き	む
⑦	む	き	む	⑦	む	き	む
⑧	む	き	む	⑧	む	き	む

○形状言ハ上巻ニ全圖を出シ

辨ハ運用辭ありけり以下五階の辭どもにひつて
 次下ハあらんも此圖を見てあらんべし、まゝ

作用言第一階辭

示サるる以下ニ示サるる

①	ナイ	②	ナイ	③	ナイ
④	ウ	⑤	ウ	⑥	ウ
⑦	マシヤウ	⑧	マシヤウ	⑨	マシヤウ
⑩	ウナラ	⑪	ウナラ	⑫	ウナラ

「花ハ咲む」といふサカナイといふ意「花ぞ咲ぬ」といふサ

カナイワイといふ意「花こそさかぬ」といふハサカナイガマ
アといふ意なり「花さかむ」といふハサカウといふ意「花
こそさかめ」といふハサカウガマアといふ意なり「花ハさか
ま」といふハサキマシヤウといふ意「花こそさかま」か
どつハサキマシヤウガマアといふ意なり「花よさうさむ
とつハサカウナラヨイ」といふ意なり「花さかむ」といふ
ハサカウナラといふ意なり

作用言第二階辭

て

つ	タ テシマウタ	つる	タロイ テキタロイ	つれ	タカマ テシマカマ
けり	タチヤ テキタジヤ	ける	タロイ テキタロイ	けれ	タカマ テキタマ
む	ウ テイナウ			む	ウガマ テイナガマ
き	テアツタ	し	テアツタロイ	り	テアツタマ

「花さき」といふハ雅言俗言差別なり「花ハさきつ」といふ
ハサイタ又サイテシマウタといふ意「花こそさきつ」といふ
ハサイタロイ又サイテシマウタロイといふ意「花こそさか
つ」といふハサイタカマ又サイテシマウタカマといふ意
なり「花ハさかけり」といふハサイタヂヤ又サイテキタヂヤ
といふ意「花こそさかむ」といふハサイタロイ又サイテキ

タワイの意「花こそさきけり」といふサイタガマア又サ
イデキタガマアといふ意なり「花はされたむ」といふサカ
ウ又サイテイナウといふ意「花こそされたむ」といふサカ
マア又サイテイナウガマアといふ意なり「花はされたむ」といふ
ハ前年サイテアツタとといふ意「花こそさきけり」といふ
ハ前年サイテアツタワイとといふ意「花こそさきけり」といふ
ハ前年サイテアツタガマアとといふ意なり
たりを心とそ
見るなり

作用言第三階辭

しら	デアラ	しら	デアラ
ア	バキ	ア	バキ
めり	トミエマ	めり	トミエマ
まど	マイ	まど	マイ
ちり	キ	ちり	キ
と		と	
や	サ	や	サ

「花はさきけり」といふサイテアツタとといふ意「花こそさき
けり」といふサカマアとといふ意なり「花はさきけり」といふ
とといふサカマアとといふ意なり「花はさきけり」といふ

つのはいさあふりてサイタカヨイとの意のバーあり花
 ぞさくまゐとのいサタベキーデアアととの意花ぞさ
 くはひまとのいサタベキーデアアウガマアとの意なり
 「花はさくめりとのいサクトミエマスとの意」花ぞさくめ
 めるといふサクトミエルワイとの意「花こそさくめ」と
 といふサクトミエマスガマアとの意なり「花のさくま
 とといふサクマイとの意」花ぞさくまといふサク
 マイワイとの意「花こそさくまといふサクマ
 イガマアとの意なり」花はさくまといふサクマ
 といふ意「花こそさくまといふサクワイとの意」花

こそさくまといふサクマヤガマアとの意なり「花
 ぞさくまといふ終止ある詞をのひあ」とて下つて
 る辭なりといふ雅俗差別なり「花のさくま」といふ
 サクサといふ意とてサハ詞の下ふとていふ詠嘆の辭
 なり

作用言第四階辭

あ

ガマナア

ふ

さ

ガヤ
ざんがヤ

さ

フイ
アタワイ

おれ

オカサ
オカサ

[illegible]

花のさくふちをよめるはサクヂヤナアといふ意なり。花の
さくふちをよめるは雅俗差別なり。花はさくなりといふはサ
クヂヤ又サクエアルチヤといふ意。花をさくたるといふはサ
クワイ又サクエアルチといふ意。花をさくたれといふは
サクヂヤガマア又サクエアルヂヤガマアといふ意なり。このな
りにならむとも運用ども三階のなりにならむといふ
運用なり。ちと三階のちと階ある異ありを定めたり。花
のさくをよめるは雅俗差別なり。



ソユダ

ナレド

天

ナレドモ

花まけむとりつらサイカガマズソコデまの意なりソコデ
と解するが第五階のその俗意なり「花まけど」とつら
サイカガマズナレドとの意「花いさけむ」とつらサイ
カガマズナレドとの意なり以上作用言五階の辭テマス
の俗解なり圖面として「あそむて心うぐ」

形状言の辭も作用言の辭とあつることを知るべし別
に解を出さざればして知るべし

希求言使令言之辨

物をあはせしむとあはまざる詞は二種ありその一種は希
求といふその一種を使令といふかく二種あるなり
あまてふもその詞はひとつなりたゞ用ひききふよりて
意のかはりてあるは希求あるは使令とちなり
下ふ出ま図また俗解を見てもさうなるべし但
形状言の希求使令あり事なるとは作用言の図

のしをせり

希求言 使令言 指掌圖

五階

第四				
咲	押	立	逢	住
さゆヨ	おせヨ	たてヨ	あへヨ	すめヨ
降				
ふれヨ				

四段奈行變格良行四段一格等
は五階の詞やがく希求使令と
する「花よさ」は「ちらであれ」の
類なりとあつるを中昔よりよ
といふ辭とてさのよ、あれよ
といふことなりぞ來たものとわ

二		四		五第		六第	
寝	添	譽	消	枯	植	格變行佐	格變行加
ね	そ	ほ	き	か	う	せ	せ
よ	へ	め	ゆ	れ	な	よ	よ

よう④よ②よあせ⑥よとよ
の解さうてらう

以上希求言使令言の圖をり例のさくとのふ詞とて此
二つを曉さむふさ④とつあふサイテタモレとのふ意なる
あり、是を希求言とのふまゝ、サイタガヨイとのふ意なる
あり、是を使令言とのふさ④よとつあをさてつあふま
ゝとつあふ意なるふ此例なまぶあてさうるへ
圖面は舉たふ解の運用より希求言使令言のあらは
わくの如くよく味ひさうるへ、たゞ受る解は此や
ふもなふあふもそのうだりふあふなふ初學の輩はか
つらうさうふだうさうふさうさう

編輯權助木村正辭

總裁

權少外史横山由清

岡本保孝 保存

神祇大錄

小中村清炬

榊原芳野

同撰

黑河真賴

間宮永好

塙忠韶

言語別記下卷

明治十八年九月六日翻刻御届

大阪府平民

翻刻出版人

發賣書肆

同

田中 太右衛門

南區安堂寺橋通四丁目六十五番地

中川 勘助

東區博愛町四丁目三十三番地

此村 庄助

南區順慶町四丁目二番地

天和八木 藤田伊三郎

和泉岸和田 永田庄治郎

同 五條 本城久平

同 貝塚 大石耕策

同 宇陀 松尾德三郎

同 佐野 米納三郎

同 郡山 魚丸馬吉

同 樽井 西尾長平治

同 長守 藤田平重郎

同 河内板方 多田喜平治

同 御所 岸宣美

同 八尾 林惣助